

浄土

1986-2

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌）第三二五号
昭和六十一年一月二十五日印刷 昭和六十一年二月一日発行
第五十二卷 二月号





二月の秀句

暮れそめてにはかに暮れぬ梅林

日野草城

諸鳥の地に嘆かへり涅槃像

水原秋桜子

色に散る納めまち針堂のもと

高浜年尾



仏の身を観奉るを以ての故に、亦
仏の心を見奉る。

——『観無量寿経』真身観文

目 次

法 話

涅槃会に想う……………水 野 善 朝……(2)

お浄土を信じる

——涅槃会のこと——……………長谷川 岱 潤……(7)

<連載> 一紙小消息 ⑦

仏は自ら来迎し給う……………村 瀬 秀 雄……(12)

み仏とともに =11=

——高僧, 林彦明上人の死——……………安 居 香 山 ……(18)

《読者のページ》

菩薩行と念仏行を考える……………上 野 浩……(23)

ひとこと御礼を……………小 林 治 郎……(26)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(七)……………木 下 隆 一……(29)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第20回

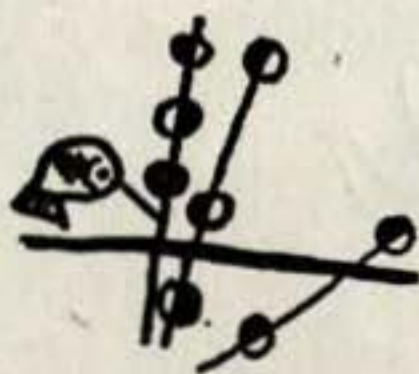
神聖病後遺

……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「節分草」 松浦春子 画

涅槃会に想う



おシャカさまのお亡くなりになったことを
ネハン(涅槃)に入られたといい、そのお徳を
偲んで催す法会を涅槃会といっている。元来
は二月十五日がその日なのであるが、わたし
の住んでいる地方では一カ月おくれの三月十
五日に行われる習慣になっている。その理由
はおそらく気候的な条件によるものと思われ
る。ひな祭り、端午の節句なども同じように
一カ月おくれである。

水野善朝

(長野市往生寺住職)

冬の寒さが衰えて雪も消え去り、ようやく
春らしいぬくもりが四辺をつつみ始めるころ
に、お涅槃の日はやってくる。わたしの子供
のころは、それまで雪に閉ざされていた山や
畠が一齐に肌を現わし始め、待ってましたと
ばかりに外へ飛びだして、山遊びにかけずり
廻り、その足でお寺に立ち寄って、「やしょ
馬」の御供に有りついて、手に手に幾つかの
「やしょ馬」を貰って帰る子供たちが多かつ

た。かれらはこの日を待ちかねていたものである。

「やしよ馬」というのは、米の粉をよくこねて蒸かし、蒸かしあがった餅状のものを臼で搗いてから大きな俎なの上で伸しながら、直径五、六センチ、長さ三、四十センチの細長い円筒形状の棒のようにする。それに二本の竹笹を四、五センチの間隔をおいて平行に当てて力強く押しつける。しばらくして離すと円筒形状の餅の肩に二本のくぼみが走って残る。これを一日か二日放置しておいてから、一センチ足らずの厚さに切ると、分厚い煎餅せんべい形の「やしよ馬」ができ上る。米の粉をこねるときに紅を入れるときれいな赤い「やしよ馬」となり、青海苔あおのりを入れると草色に仕上がリ、時には豆を入れることもある。わたしはこの豆の入ったのが好きで、先を争って手にしたものである。

もう遠い過去のことになってきたが、昭和十六年に太平洋戦争が始まってからというも

のは米の粉が手に入らなくなり、「やしよ馬」の自家製ができなくなった。それと共に近所の子供たちが「やしよ馬」を求めて、お寺に群がってくるという習慣も絶えてしまった。

戦後の食糧難の時代も去って、米の粉も自由に入ることになって、わが家の「やしよ馬」作りも一時は復活したが、その頃になると巷の餅屋や菓子屋で「やしよ馬」を売り出すようになった。仏前にお供えする以外にたくさん「やしよ馬」を作る必要がなくなった昨今では、わが家でも店頭品で間に合わせているが、どことなく物足りない気がしてならない。

涅槃会に欠かせないのが、おシャカさまの涅槃像であるが、多くはその絵図を掲げて祭壇とする。サラ双樹の下に静かに横たわるおシャカさま、それを囲んで嘆き悲しむ弟子の阿難アナンをはじめとする人々や動物たちの群れ、この劇的な場面は、古来多くの人々の胸をど

んなにか打ってきたことであろう。この模様は「涅槃経」に説かれているわけであるが、わたしは学生時代に、パーリ語の「マハーパリニッパーナスutta」に接して、おシャカさまの最後の状況を知った時の感激が、今でも鮮やかに甦ってくる。

八十歳の高齢に達せられたおシャカさまの最後の旅は、生まれ故郷を目ざしてのものであった。カピラヴァスツの生地を二十九歳の時に去り、六年の修行を経て三十五歳で悟りを開かれ、以後四十五年間に渡っての伝道の旅は続いた。その範囲は当時の二大勢力であったマガダとコーサラの二国の地方を含み、現在の日本全土に匹敵する広範なものであった。

旅の途上、パーヴァーという地で、鍛冶工の子であるチュンダからきこの料理の供養を受ける。その直後激しい下痢に見舞われ、疲れを訴えられるが、時には坐り、時には横たわって休みながら歩を進められる。そして遂

に最期の地となるクシナーラーへとやってこられる。

「さあ、アーナンダよ。わたしのために、二本並んだサーラ樹（沙羅双樹）の間に、頭を北に向けて床を用意してくれ。アーナンダよ。わたしは疲れた。横になりたい」と。（中村元訳『ブッダ最後の旅』岩波文庫本、以下同）

アーナンダは言われるままに床を敷いて休ませておあげする。そのとき沙羅双樹が時ならぬのに花が咲き満開となった。おシャカさまの臨終が迫ってきた。アーナンダは悲しみを堪えきれず泣いた。

「やめよ、アーナンダよ。悲しむな。嘆くな。アーナンダよ。わたしは、あらかじめこのように説いたではないか——すべての愛するもの・好むものからも別れ、離れ、異なるに至るということをおよそ生じ、存在し、つくられ、破壊さるべきものであるのに、それが破滅しないように、という

ことが、どうしてありえようか。アーナンダよ。そのようなことわりは存在しない。アーナンダよ。長い間、お前は、慈愛ある、ためをはかる、安楽な、純一なる、無量の、身とことばとところとの行為によって、向上し来れる人（『ゴータマ』）に仕えてくれた。アーナンダよ、お前は善いことをしてくれた。努めはげんで修行せよ。速やかに汚れのないものとなるだろう。」とおシャカさまは宥められる。そしていよいよ最後のとき、次のように論される。

「アーナンダよ。あるいは後にお前たちはこのように思うかもしれない。『教えを説かれた師はましまさぬ、もはやわれらの師はおられないのだ』と。しかしそのように見なしてはならない。お前たちのためにわたしが説いた教えとわたしの制した戒律とが、わたしの死後にお前たちの師となるのである。……」

このあと、おシャカさまは修行僧たちの互

いの呼びかけの仕方についての注意を与え、小さな戒律箇条の廃止を許し、なお疑問があれば質問するよう求める。修行僧たちは黙っていてだれも口を開かない。そこでおシャカさまは、

「さあ、修行僧たちよ。お前たちに告げよう、『もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成なさい』と。これが修行をつづけて来た者の最後のことばであった。」

このパーリ文による「大ネハン経」の教えるところは興味深い多くの問題を含んでいるのだが、おシャカさまの臨終のことばだけに限ってみると、わたしが亡き後の師となるものは、わたしが今までに説いてきた教え、すなわち「法」と「戒律」とである、と示されていることと、最後に「怠ることなく修行を完成せよ」と言われていることである。現在の私たちが、仏法僧の三宝に帰依し、五戒を守るこれが仏教徒としての生活の規範となっ

ている根拠がここにある。

わたしは昭和五十六年二月一日、おシャカさまネハンの地クシーナガルを訪れる機会に恵まれた。おシャカさま在世当時のものではないが、サーラ樹が空高く突いて立っていたし、その茶色になった落葉が散乱していた。

それは簡単に拾うことができたにもかかわらず、その土地の子供たちが二枚三枚と手にして、外国人観光客であるわたしたちに売りつけようと集^{たか}つてきた。そこにはかつての僧院址が、煉瓦の壁の基盤部分を基盤の目状に遺していた。時にはその煉瓦の上に登って歩いたりして涅槃堂を拝観した。大きなかまぼこを伏せたような型をした屋根の建物の中に入ると、身の丈約五メートル位の大きな涅槃像が横たわっていた。その仏前で四誓偈を誦経して参拝した。涅槃堂の裏に回ると、往年のストウーパ（塔）の址があった。今では煉瓦が瓦礫のように崩れて、わずかに塔らしい形を

その基礎部分だけ遺していた。その煉瓦の崩れた一隅に、ツアーの仲間のある老人が、親の分骨を埋めていた。ここに睡^{ねむ}ることがその人の願いであったという。西に陽が沈みかける時であった。やっと積年の想いを果たせたその老人の顔を、弱まった陽の光が照らしだしていた。安堵と喜びの微笑^{えみ}が漂っていたその表情を、わたしは忘れられない。

おシャカさま臨終の最後のことばは「怠りなく励め」という一語につきる。平凡なことばのようであるが、頭をがんとして強く打たれるような気がする。日常生活を反省してみると、怠りが無いとはいえない毎日である。涅槃像の中に横たわっているおシャカさまの姿は、寂静の境地そのものを表現しているが、あのような境地に到達するためにも、日々怠りない精進が必要なのだと感じている。そういう意味で、涅槃会は日常の生活への警告の日でもある。

(法)

(話)

お浄土を信じる

—涅槃会のところ—

はせがわ たい じゅん
長谷川 岱 潤

(東京・品川区戒法寺住職)

朝窓を開けてみたら、屋根の上が霜で真っ白になっていました。昨晚からおばあちゃんの様態がおかしいという連絡があり、家中の人が何か緊張した顔で朝の身支度をしていました。小学校五年生のミーちゃんが、今日は学校が休みなのに、いつもより早く起きて冷たい水で顔を洗っているときのことでした。

電話のベルが鳴り、おかあさんが即座に受話器を取りました。

「おばあちゃんがいよいよみたいなんだ、早く来てくれないか」

おじさんの早口な大きな声が、電話のそばにいたミーちゃんにまで聞こえました。



おかあさんは、ガスの火を止めるとすぐオーバーをとり、ミーちゃんはマフラーを首に巻いただけでおもてに出ました。おとうさんと妹のチーちゃんはもうすでにおもてで待っていて、おかあさんが出てくるのを待ってみんなでいっしょにおばあちゃんの家に走りしました。

おばあちゃんの家は、ミーちゃん家から走ると五分ぐらいです。

おばあちゃんの家に着くと、いとこのキヨにいちちゃんが来ていて、おばあちゃんの横に座って、おばあちゃんの手を握ってあげていました。キヨにいちちゃんは昨日の夜電話をもらって、仙台から東京のおばあちゃんの家まで夜通し車で来て、今着いたところだと話していました。

キヨにいちちゃんと久し振りにあったおばあちゃんは、手を握ってもらってうれしそうに微笑んだ顔をした後、目をつぶってしまいました。おにいちちゃんがいくら呼んでももう目を開けようとはしません。おとうさんもおかあさんもミーちゃんもチーちゃんも、おじさんもおばさんもみんなで呼んでも、もう二度と目を開けようとはしませんでした。傍らにいたお医者さんの片岡先生が、キヨにいちちゃんにかわって横に座ると、脈をとったり目を見たりしばらくしていましたが、やがておばあちゃんの両手をとって胸の上で合わせて席を立ちました。

おじさんやおばさんやおかあさんのすすり泣く聞が聞こえました。その声を聞いて、ミーちゃんとチーちゃんもおばあちゃんが死んでしまったことがわかりました。ミーちゃんとチーちゃんも大声をあげて泣きました。おとうさんの膝の上のにぎった手が、小刻みに震えているのが忘れられませんでした。

その晩お通夜が行なわれました。

おばあちゃんのご兄弟の人たちやそのお子さんたちなど、ミーちゃんが今まで会ったこともない親戚の方たちが大勢おばあちゃんのために来てくれました。

若いお坊さんが来てとても長くお経をあげてくれたので、みんな足がしびれてしまいましたけど、ミーち

さんは大丈夫でした。

お経の後、お坊さんが「今日は、おばあちゃんの人生の卒業式で、明日は、お浄土に生れる入学式ですよ」と、話してくれました。ミーちゃんは、自分のときの幼稚園の卒園式と小学校の入学式のときのことを思い出して、おばあちゃんはひとりでこんなに大勢の人に来てもらって式をするのだからすごいな、幸せだなあと思いました。

お通夜の晩は夜通しみんなでおこもりをするのだそうで、ミーちゃんとチーちゃんもおばあちゃんのところに泊ることになりました。夜通し起きていいといわれて何となくうれしくなり、ミーちゃんとチーちゃんがお線香の番をかってでたのです。

夜中にミーちゃんは、おとうさんとおばあちゃんの祭壇の前でこたつに入りながら、おばあちゃんのことを話していて、さっきのお坊さんの話しが気になって、おとうさんに聞いてみました。

「おばあちゃんはこれからどこへいくの」

ミーちゃんの突然の質問に、おとうさんもびっくりして、どう答えていいかしばらく迷っているようでしたが、ゆっくり話してくれました。

「おとうさんが昔ポリネシアという、太平洋に浮かぶ小さな島に行ったとき、ポリネシアの人々は死ぬときに、空の星を指差して、私が死んだらあの星に生れるんだといって、みんな自分の好きな星を指差して死んでゆくんだという話を聞いたことがあるんだ。おばあちゃんは、いつも仏さまをお参りしていたし、四国の霊場を回ったりして、観音さまをいつでもお参りしていたでしょう。だからきっと、観音さまのいらっしゃるお浄土に生れて、喜んでいると思うよ」

死んでしまったことが悲しいのと、おばあちゃんがかわいそうだと思う気持ちでやるせなかったミーちゃんにとって、おとうさんの話で救われたような気がしました。そしてさっきのお坊さんの話もやっと理解でき

ました。

ミーちゃんはよっぱどほつとしたのでしょう、そのままやすやと眠ってしまいました。

あくる日ご葬儀（お浄土への入学式）が終つてお別れするとき、ミーちゃんは、自分のアルバムからもつてきた、おばあちゃんの孫全員の写真を、おばあちゃんの顔のところに置いてあげました。お浄土に行つてもさみしくないようにと願う、ミーちゃんのやさしい心がこもっていました。

それから、火葬場に行つてまたびっくりしました。その日がちょうど、友引の次の日だったせいもあつて、まるで戦争のようなお騒ぎでした。ミーちゃんは、こんなに毎日人が死んでいるのかと思うと、とってもやるせなくなつてしまいました。

帰りの車の中でミーちゃんが大声をあげました。

「おばあちゃん、お浄土でおじいちゃんと会えたかしら」

おとうさんが、隣りでにこにこ笑つてうなずいていました。

私がミーちゃんからこの話を聞いたのは、ご葬儀から数日たった、私がちょうど涅槃図の絵を見ているときでした。

「おしろうさん、おとうさんが言つたことは本当だよね」

「もちろんだよ、おばあちゃん、きつと今ごろおじいちゃんに、ミーちゃんが渡したミーちゃんたち孫たちの写真を見せて、いっしょに喜んでいるよ」

「よかった、写真あげたの正解ね。ねえ、おしろうさんが見てるその絵、何の絵」

「これはね、おしやかさまが亡くなったときの絵なんだよ。ほら動物たちがみんな悲しんで泣いているでしょ。それにほら、おしやかさまの両脇の二本の木だって、悲しくて真っ白に枯れてしまつたんだよ」

「木も悲しんでるんだ」

「ミーちゃん、おしゃかさまの足もとで、人一倍嘆き悲しんでいるおばあさんがいるでしょう」

「この白い髪のおばあさん？」

「このおばあさんはとってもかわいそうな人なんだよ。このおばあさんはね、おしゃかさまに会いたくて、そのお話を一度でもいいから聞きたくて、おしゃかさまの後を追って、インド中を旅してきたのに、お会いできたときは、もう既におしゃかさまはお亡くなりになってしまっていたんだまだから、お浄土があることも、何も聞くことができなかったんだよ。その後、おしゃかさまのお弟子さんたちが、おしゃかさまのお話をまとめてくれたので、私たちは聞くことができるんだけど、もう年老いたこのおばあさんには、その時間もなかったんだね」

「うちのおばあちゃんのほうがしあわせなんだね」

ミーちゃんは、やさしいまなざしで、ずっと涅槃図に見いつていました。

ミーちゃんが帰ってから、私は独りで考えていました。人間は誰だって死ぬわけだし、毎日大勢の人が亡くなっているのに、肉親の死や、自分自身の死に直面しないと、なかなか死ぬということは考えられないように思います。ですから、おしゃかさまは、自らの身をもって肉体は死ぬということを示してくれた。その日が二月の十五日だと思うのです。というより、少なくともおしゃかさまを神聖化した当時のお弟子たちにとっては、二月十五日はそういう日だったと思うのです。

つまりこの涅槃会という日は、死という問題について、抽象的にではなく、肉親の死、自分の死という問題として、まじめに考えるときとしたいと思っています。そしてそうすることによって、ミーちゃんのように、お浄土を深く信じることができるようになるのではないのでしょうか。お浄土を信じられるように努力すること、それが仏道の修行だと思っています。

一紙小消息

⑦

仏は自ら来迎し給う

村瀬 秀雄



「諸仏の中に弥陀に帰したてまつるは、三念五念に至るまで自ら来迎し給故なり」

平生から念仏を唱え続けている者はいうまでもないが、たとえ三念五念の念仏しか唱えられなかった者に至るまで、臨終に際して阿弥陀仏は菩薩を従えて自ら来迎し、その者を極楽浄土に導き給うのである。それというのも阿弥陀仏が来迎引接の本願を成就し給うて

いるからであって、このことを善導大師は次のように説いている。

「釈尊は多くの法門を説き給うたが、何れも解脱を得させるための教えであった。しかしその中にあって念仏を唱えて西方極楽浄土に往生するように勧め給うた法門こそ最も勝れた教えである。生涯を通して念仏を相続した者から臨終に初めて十念を唱えた者、あるいは三念五念の念仏を唱えた者に至るまで、阿

弥陀仏は来迎し給うのである。それというのも阿弥陀仏が本願を成就し給うているからであって、どのような凡夫であつても念仏を唱えていけば、臨終には仏に導かれて直ちに往生できるのである」(法事讃)

法然上人は仏が本願を成就し給うている以上は、念仏さえ唱えていけば臨終に仏の来迎を蒙ることは自然の真理であるとして、次のように説いた。

「天然自然の道理というものがある。炎は空にのぼり、水は低い方に流れてゆく。菓子の中には酸いものがあり、甘いものがある。これらは何れも天然自然の道理である。阿弥陀仏の本願は罪深い悪人であつても、念仏を唱えれば極楽浄土に導くであらうと誓い給うているのであるから、ただ一向に念仏を唱えてさえいけば、仏の来迎を蒙ることは天然自然の道理であつて、少しの疑いもないことである」(常に仰せられける御詞)

われ等凡夫が心配していることは、恐らく

臨終の苦しみが大きいであらうということである。臨終には死苦ばかりでなく、煩惱が次々に起つて苦しむものである。中でもわが身に対する愛着、親族や家財に対する愛着、来世に善い所に生れたいと願う愛着を三愛といつて、自分の力ではどうにもならない煩惱である。ただできることは仏助け給えと願つて念仏を唱えることしかない。阿弥陀仏はこうした凡夫の苦悩を憐れみ、心を乱すことなく極楽往生を願わせるために、自ら来迎し給うのである。仏の来迎を蒙れば、どのように苦しんでいた者でも一切を忘れ去り、代つて勸善の心が起つて仏を拝し奉るのである。そして自らを省みると、すでに金色の蓮華台に乗つて仏の後に従い、早くも極楽浄土に向つてゐることに気がつくのである。このように仏の来迎は苦悶している者を正念にもどすために、その者の目の前に姿を現わし給うのである。上人は次のように説いている。

「真実心から極楽往現したいと願つて阿弥陀

仏の本願を頼みにし、念仏を唱えている者ならば、どうして臨終に悪く苦悶することがあるであろうか。何故なら仏が来迎し給うわけは、行者の臨終に正念を得させるためであるからである。このことを心得ていない人は、臨終に心を乱すことなく往生を願って念仏を唱えてこそ、仏は来迎し給うのであるとばかり考えている。このような人は仏の本願を信じていないのであり、經文の意味をよく理解していない人である」(浄土宗略抄)

そうはいっても臨終のことを考えると、何んとも恐ろしい気が先だって、不安を除くことは容易なことでない。それなら仏の来迎を信ずるには何うしたならよいか、証賢は次のように説いている。

「臨終には念仏の声を使うにして仏や菩薩たちが来迎し給うのであるから、少しも心配することはない。その時まで執着していた心が自然に消えてゆき、わが身を愛していた心もなくなり、命を惜しむ気持も失せて、往生を

願う心の外はすべて忘れ去ってしまうであろう。そうはいっても普段から死を恐れない用意だけはしておかなくてはならない。昔の学僧たちも死を恐れずに眠るようにして死にたいものであるといっている。このように死を恐れずにいられるのは、この世を去ったならば直ちに極楽浄土に往生できると固く信じているために、安心して暮していられる者の気持なのである」(西要鈔)

造悪破戒の凡夫の往生を説いた下品の三生の經文には、何れも臨終に仏法を説く善友にあうことができて、勧められて念仏を唱えたので往生できたと説かれている。しかしいざ臨終を迎えた時に善友を招くだけの余裕があるとは思えないし、經文の通りにすることは実際にはできない。そこである人が法然上人に臨終に善友と会わなくてもよいのかと尋ねた。上人は答えていった。

「臨終に仏法を説く善友を招かなくてもよいし、また心が乱れて何一つ思うようにならない

くてもやむを得ない。それより普段から念仏を唱えている者ならば、必ず往生できるのである」(百四十五箇条問答)

また下品上生では僅か一声の念仏を唱えたにすぎない者が仏の来迎を蒙って、直ちに往生できたと説かれている。そうすると臨終に唱えた念仏は、平常に唱えている念仏よりも大きな功德があるように思われる。ある人が上人に問うているのに、臨終に唱える念仏は真実心がこもった真剣な気持で唱えるから功德が大きいのであって、平生の念仏はそれだけの気持がないから長年にわたって唱えていても功德が劣るのであるまいかといった。上人は答えていった。

「經典には、真実心をもって仏の本願を深く信じ、極楽往生したいと願う三心を具えて念仏を唱えていれば、必ず往生できると説いている。このようにして唱えている念仏の功德に平生と臨終という区別がない。臨終の一声の念仏は百年の業より勝るといわれているが、

功德にそのような違いはないが何故なら平生の念仏で必ず往生できると説かれているからである」(禪勝房に示されける御詞)

たとえ臨終に念仏が唱えられなかったにしても、平生から念仏を唱えてさえいけば、臨終に仏の来迎を蒙ることによって心の乱れがやみ、正念にもどって往生できる。上人は次のように説いている。

「平生からよくよく念仏を唱えていれば、それによって仏は必ず来迎し給うであらう。仏が来迎し給うたのを見奉れば、行者は心が静まって正念にもどることができる。それなのに平生の念仏は役にたたないと思い込んで、わけもなく臨終に正念にもどることばかりを願っている人があるが、これは大変な間違いである。仏の本願を信じて念仏を唱えている人ならば、普段から臨終の時のことを疑っていてはならない。ただしその時々唱えている念仏は、あくまで誠の心で唱えていなくてはならない」(浄土宗略抄)

平生の念仏といい、臨終の念仏といたりすると、何か区別があるように思われてくるが、唱える念仏に何んの違いもあるわけがない。上人は常にいつていた。

「極楽往生をとげるためには、臨終の念仏も平生の念仏も共に大切である。何故なら經典には念仏を唱えるのに、何れの時という区別が説かれていないからである。恵心僧都は臨終の念仏を説いているが、同時に平生の念仏もまた大切であるとしている」(常に仰せられる御詞)

仏の本願は念仏を唱える者の善悪、罪の軽重を問わないのであるから、仏の来迎も人を選び給うことがない。ある人が上人に問うていうのに、常に善人であるように努めて念仏を唱えた方がよいのであるまいかといった。上人は答えていった。

「悪いと気がついたならば直ちにやめ、努めて善いことを行うのは、すべての仏が同じように説き給うた戒めである。しかし当世のわ

れ等はこの戒めをよく知っていながら、いつも背いてばかりいる身である。それよりは仏が慈悲心によってたて給うた本願を深く信じ、偏えに念仏を唱えているのがよいのである。念仏を唱えていれば、その者に知恵があつてもなくても、持戒の者でも破戒の者でも差別することなく、阿弥陀は臨終に來迎し給うのである」(百四十五箇条問答)

臨終はいつどこで、どのようにして訪れてくるか判らない。そのために普段から怠らずに念仏を唱えていて、いつ臨終を迎えてもよいだけの用心がなくてはならない。上人に次のように教えている。

「先徳たちの教えによれば、臨終の時には西の壁に阿弥陀仏の尊像を安置し、病人はその前に西向きに臥し、善知識が勧める通りに念仏を唱えているのがよいとされている。これこそかくありたい用心というものである。しかし人が死に見舞われることは、かねてから考えていた通りにならぬものである。家の中

にいても急に死ぬことがある。あるいは便所の中で死ぬ人もある。止むを得ない前世の因縁によって大刀で切られて命を失ったり、火にやけたり水に溺れて死ぬようなことは、しばしば話に聞いている通りである。このように不慮のでき事で命を失ったにしても、日頃から極楽往生したいと願って念仏を唱えてさえいれば、まさに息が絶えよらとした時に、阿弥陀仏は観音勢至等の菩薩を従えて来迎し給うということを信じていなくてはならない」(或人のもとへつかはす御消息)

念仏往生の願は他力本願であって、念仏を唱えていれば仏の力によって誰でも往生することができ。それと同じように念仏を唱えていれば、誰でも臨終に来迎すると誓い給うた来迎引接の願もまた他力本願である。来迫は仏の慈悲心によって、誰でも蒙ることができる。上人は次のように説いている。

「われ等は戒律という舟や筏を破っているために、生死の世界という大海を渡る因縁をな

くしている。智慧という光が曇っているために、生死を繰り返している闇を照らすことができない。聖道門の修行によって悟りを求めたくても、その教えの道から漏れてしまっている。われ等のために施し給うた他力というのは、第十九の来迎引接の願である」(法性寺信実の伯母なる女房に遣はす御返事)

經典は次のように説いている。

「ここに善男子または善女人、あるいは造惡の凡夫がいて、念仏を唱えれば必ず往生できるといふ念仏の功德を聞いて念仏を相續し、時によっては一日ないし七日にわたって一心不乱に念仏を唱える。そうすればその者の命終の時に阿弥陀仏は多くの菩薩とともに来迎し給う。仏の来迎を蒙って、その者は臨終に導かれて直ちに極楽浄土に往生することができる」(阿弥陀經)

たとえ臨終になって初めて三念五念の念仏を唱えた者でも、二重の他力本願に乗じて極楽往生をとげることができる。(つづく)

み仏とともに

=11=

—高僧、林彦明上人の死—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

九月も下旬ではあったが、焼のが原になった沼津は、まだ暑かった。師籍の乗運寺では、ほっ建て小屋が立てられて、住職の林輝彦師が事務をとっておられた。そして、寺族一同は、千本松原の知人の小さな一棟を借りて、そこで住んでおられた。終戦直後としては、めぐまされた家屋であった。

早速私は、恩師、林彦明上人の霊前にぬかずいた。霊前と言っても、床の間にお名号が掛けられているだけの所に、小さな写真が飾られていた。いろいろなことが走馬灯のように走り、私は霊前でさめざめと泣いた。

幸い未亡人となられた柳雨夫人は元気でおられ、私が早々と除隊してきたことを、心から喜ばれた。そして、恩師の空襲を受けられてより、遷化に至るまでのことを、詳しく話された。何分にも、終戦直後の事で、碌な葬儀もできず、棺桶さえも仲々に手に入らぬ有様であったという。

「勿論、自動車一つあるわけでないので、荷車にお棺を乗せて、火葬場に運び、寄せ集めた木で、茶毘にしたのです」

目頭をおさえながら語られる夫人の説明に、私もまた目頭をおさええた。日本に名だたる高僧の告別が、こんなことでよいのであろうか。日中平和を叫び続けられた恩師の最後が、なんということだ。私は怒りさえも覚えたが、敗戦国となった今となつては、どうすることもできなかった。



——林僧正渡支記念——

しかし、恩師の死に臨まれる経過を事こまかにうかがった時、私は流石に古来まれにみる高僧よと、感激を新たにす

ると共に、誇りと喜びさえも感じた。上人は、空襲で相当な火傷を負われた。しかしそれは、生命をおびやかす程にひどいものでなかった。それよりも、空襲の中で、研究を進められていた「大乘起信論」の研究資料や、多くの蔵書を灰燼に帰せしめたショックの方が大きかった。

私が見舞に帰ってきた時も、盛んにこの事を語っておられたことは、前にも書いた。こうした傷やショックが重なり、急に体力が消耗された上人は、急に容態が悪くなり、八月下旬には、重態におち入られたという。上人自身も、その事を自覚しておられたらしく、九月に入つた或る日、夫人に向つて、

「そろそろ、私の死期が近づいてきたようだ。元気なうちに、しておきたいことがあるから、用意して欲しい」

と、重い床の中からいわれ



——乗運寺・林彦明上人の墓——

た。

先ず、枕元の床の間に六字の名号をかけるようにいわれた。そして、そこへ三具足を揃えて、供養のできるようにすることを求められた。更に、焼け残った浄土三部經の折り本を、自分の寝ている床の周りに、屏風のように立てかけるように指示されたということであった。夫人は、いわれるままにその準備をして、それが終わったことを告げられた。

「ああ、これで浄土の莊嚴が整った。さあ、私を起しておくれ。供養をしたいから」

上人は、決して起きられるような容態ではなかった。しかし、いわれるままに手をまわし、端坐できるまでに上人を起し、珠数を渡した。

上人はおもむろに合掌し、先ず、西方阿弥陀如来を供養して十念を称え、次に高祖善導大師や、元祖法然上人など、歴代諸上人の莊嚴浄土を念じて十念し、更に、乗運寺開山上人、歴代諸上人の莊嚴浄土を念じて十念し、そして最後に、檀家各家先祖代々の諸靈位を供養された

ことである。

「これで、総て終った。さあ寝かせておくれ。これから後は、皆でできる限りお念仏を称えてくれ。私も称えるから」

そう言って、頭北西面して床につき、「なむあみだぶつ」と称え続けられた。夫人達もともどもに、お念仏を称えられた。それから何日もたたぬ内に、上人は声もでず、ただ口だけが動いていたが、お念仏を称えながら、眠るように遷化せられたという。

ああ、なんと立派な御往生であることであろうか。私は今更のように、この話を聞いて、林彦明上人の人格の立派さ、尊さに、感を新たにするものがあつた。今まで、幾度か、こうした高僧の話を聞いてはいたが、いまの当りに、恩師のご遷化の状に接し、感慨にむせんだのであつた。そして、こうした高僧を師匠としてもった私のしあわせを、今更のように、有り難く感じたのであつた。

沼津が急襲を受けた時、見習士官であった私が、空襲や艦砲射撃の危険な中を、はるばる沼津まで福知山から見舞いにかけてつけたことは、前に書いた。そして、その時肩を叩きながら、難しい上人の研究を聞かされたが、それが、「大乘起信論の新研究」であったことも、前にふれた。

この研究成果が、どのようなものであったかは、その草稿の殆んどが烏有に帰した為分らないのであるが、たまたまその一部の原稿が、昭和二十年二月五日、中支の蘇州において書かれ、文淵堂の金尾種次郎氏に送附されていることが分った。

それを沼津の乗運寺が、昭和二十年十月に遺稿として、上人追善の為に謄写印刷し、塚本善隆博士の序文をつけて出版している。これによって、上人の「大乘起信論」研究の一端を知ることができる。

余は以為らく、梁陳の頃、武周の法難を南方に避け

たる北地の学匠が、撰論等を学び、新しき学説に触るるの時、偶々、梁武帝の神魂不滅論に対する欽定に警醒刺激され、それに共鳴附和せんが為に捏造したる一種の神魂不滅論が、此の起信論であると、余は信ずる。

いかにも難しい文体であるが、この文体にも、上人の風格がよくあらわれている。そして、その内容は、「大乘起信論」の中国述作説を、思想的に断定したものであるのである。もし、沼津の空襲がなかったならば、そして、上人が更に長寿を保っておられたならば、この研究は更に大きな結実となり、学界に波紋を投げかけたことであろうが、も早やどうすることもできない。もしや、もしやとどれ程仮定してみても、いかんともし難いことである。

昭和四十八年、大正大学々長であった櫛田良洪博士の頌寿記念論集（『高僧伝の研究』、山喜房仏書林）が企画され、高僧伝がテーマとされて、論文の依頼をうけた時、私はためらうことなく上人を取りあげ、「林彦明の思想

と行動」と題して、一論を書いた。学僧であると共に、行動の人でもあった上人の一面を、この小論にまとめたのであるが、それは私の恩師に対するせめてもの報恩の積りでもあった。

上人は、百万遍知恩寺の第六十九世法主として、昭和五年十月より、昭和九年六月まで在任されていたのであるが、前にも述べたような理由で退任された為、歴代上人の墓の中には墓石がなかった。そんなこともあって、近年墓石建立のことが、門弟の間からわきおこり、資金を集めて、数年前に、漸く建立された。いまだに、その訓董を受けた門弟達が、師の偉大さを慕っているのである。私もこのことを聞き、当然のことながらこれに協力させてもらったのであるが、これもまた報恩の一端であった。

この頃、所用があつてよく京都に行くのであるが、百万遍はなんとしても懐しい、私の第二の故郷である。そこには、樹齢古い松が変らず聳え立ち、私が小僧の頃、上人に伴僧として奉仕した御影堂も、そのまま昔のおもかげを残している。

歴史の流れは、環境を激変させ、百万遍を一步外にで

ると、昔のおも影は、どんどんなくなっているが、この本山の境内一帯は、昔のままである。そんな境内を散歩していると、数々の思い出が、走馬灯のように走るのを覚えて、感慨無量である。

しかし、考えてみると、すでに歴史は半世紀も過ぎ去っているのである。人の浮世などというものは、短いものであるというけれど、それでも五十年の歳月が、私の人生と共に、過ぎ去っているのである。

(つづく)

(追記)

本稿、第九回『浄土』五十一巻十二月号)に、黒谷金戒光明寺焼失のことを述べ、当時のご法主を望月信亨上人と記したのは、郁芳随円上人に間違いにて、私の感違いでした。そして郁芳上人は、岩井上人の後、八十一世として知恩院に入っておられます。読者よりお教えを受けましたので、謹んで訂正いたします。

△読者のページ▽

菩薩行と念仏行を考える

上野

浩

仏教ほど広般で、多岐で、深奥な宗教はないと思う。そして現在私共が寺院等を通じて教えられている仏教は、それを奉ずる宗派によってそれぞれ多少のちがいはあろうが、根本においてはすべて大乘仏教の世界であつて、その影響は私共の日常生活の中に深く滲透しているところである。そこで私はいまここに大乘仏教の姿とそれが私共に対して一体何を教えようとしているのか、また大乘仏教の中で特に重要な役割を演じている菩薩とはいかなるものなのか、同時に、私共が平素称えている念仏とはどのような意味があるのかをあらためて考えてみたいと思う。

ところで、まず大乘仏教はいかにして生れてきたかをさぐってみたい。仏教の始祖釈尊の仏教教団は釈尊の入滅後、四百年ほどの間に、多くの部派に分裂してしまつた。そしてこれらの部派は何れも出家者を中心とした仏教であり、自己の修行にのみはげむ、自己中心性を脱し切っていない、消極的な仏教であるとされた。これを部派仏教と呼び、後に大乘の徒によって小乗仏教と称された。ついで紀元前一世紀のころ、小乗仏教にあきたりない在家の信者ならびに進歩的な出家者たちは、これを一切の衆生済度を目標とした釈尊の精神に還そうとする革新運動を展開したが、これから大乘仏教が生れてきたものと伝えられている。そして小乗仏教においては釈尊その人を仏陀（如来）、釈尊が悟りを開く前の段階を菩薩と呼んだのであるが、大乘仏教においては出家者および在家者を問わず、修行の結果悟りを開いた覚者を何れも仏陀、将来仏陀になりうる求道者を菩薩と呼んだ。これは小乗仏教の改革をめざした出家者および在家者自身のことでもあり、これらの人々は次々に膨大な大乘經典を編纂して行ったものと考えられる。

これらの修行完成者の手になった大乘經典の中には、

私共がこの人生をいかに生きて行くべきか、またいかにして来世を迎えるべきかという重要事について数多くの教えが説かれている。しかし私はその中でも次のような語句に特に深い関心をもつ。それは經典の中の「一切の衆生に悉く仏性あり」という句であり、また「如来蔵」という語であって、これらは何れも人間の根源は仏であり、無限に深い仏心をもっているという意味を示したものである。この思想は初期仏教の「自性清浄心」の中にもすでにみられるが、大乘仏教において特に発展した思想であるといわれている。このように、大乘仏教によって私共はすべてのものが仏心を蔵し、修行の如何によつては実に私共も菩薩になることができると教えている。

さて、菩薩とは人々を救うため、自ら誓願を立て、その完成をめざしてきびしい修行を行う求道者であり、将来仏陀となりうるもので、しかもむしろ自らの悟りをあとにしておいて、他人の悟りを先にする自利、利他を行う求道者であるといえる。そしてその宗教実践としては、ある經典は六種の完全なパラミター（布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧）をあげており、また、その修行段階を五十二位（十信、十住、十行、十廻行、十地、等覺、妙覺）

に分けて示した經典もある。

菩薩とはかくもきびしい環境の中にある。しかし私は、心ある人々が菩薩行に立向う意志を持つことが重要であると思う。同時に、私共は自分自身をふりかえり、自己の宗教的能力を深く省みる必要がありはしないだろうか。その時には恐らく宗教的能力の高い、少数の人々を除いて、多くの人々はおのれがいかに愚かで、かついかに罪深いものであるか、ある經典の言葉をかりると、いわゆる「下品」の輩であって、菩薩行などに到底堪えられないものではないことをはっきりとさることと思う。このことは偉大なる仏教指導者法然上人でさえ自らを「愚智の法然」と称し、親鸞上人また愚の自覺に徹しておのれを「愚禿」といい、「罪惡深重の凡夫」としたことに徴しても明らかであろう。

このように私共にとって菩薩行の道は極めて困難である。ところでここに大乘仏教は菩薩行とは別に私共が極めて容易に救われる道を教えてくれるのである。すなわち仏陀に向って救済を仰ぐことである。念仏行である。これは仏陀の力にたよるべきだとの教えである。そもそも仏陀というのは衆生済度のため、修行の結果本願成就

した覚者のことであり、その上その仏陀自身の仏国土をも建設している。例えば阿弥陀仏の極楽浄土、阿閼仏の妙喜浄土、大日如来の密嚴浄土、薬師仏の浄瑠璃世界、観音菩薩の観音浄土、弥勒菩薩の弥勒浄土などがこれである。この教えを浄土教といい、インドの竜樹は難行道の教えに対してこれを易行道と呼んだ。

ところでわが国においては多くの人々は、数多くおられる仏陀の中でも阿弥陀仏を最も深く敬愛し、念仏をこの仏陀に捧げる。阿弥陀仏は、出家者法蔵菩薩が四十八の本願を立て、長い間の修行完成の結果仏陀となったもので、衆生のため西方十万億の仏国土をこえたところに極楽浄土を建設してくれているのである。そもそも念仏とは本来は仏陀を心に思い浮べ、それに専念して精神統一することであるが、中国で善導和尚のころから「南無阿弥陀仏」を口でとなえることを念仏（または称名念仏）というようになった。

私はここで念仏行について偉大な仏教指導者として特に二人の名僧をあげたいと思う。一人は法然上人であり、もう一人は親鸞上人である。法然上人は、愚かで、罪深い、機根の低い庶民がすべて容易に浄土に往生でき

るように、すばらしい教えを説いてくれた。それは男女老少、貴賤上下の差別なく、出家者であろうが在家者であろうが、たとえ悪人、罪人であろうとも、口に「南無阿弥陀仏」をとなえさえすれば、余行、難行はいらず、極楽浄土に往生をとげることができると教えた。これを専修念仏といい、大乘仏教にうたう万人成仏の大目標を完全な形でとらえた一大発見ということができよう。また親鸞上人は法然上人の机下に教えを蒙り、その念仏の教えを受け継ぎ、さらにすすんで現世に考えを廻らし、阿弥陀仏の本願を心から信受するとき、その時から浄土往生は開始されると説き、たとえ肉体は亡びなくとも往生することが決まるのだという不体失往生を主張した。かくて法然上人は念仏為本、親鸞上人は信心為本の立場をとってはいるが、多くの大衆にとって立派な救い主であり、また恩人であることに変わりはない。

私は多くの人々が、慈悲深い阿弥陀仏のふところに飛び込み、常住坐臥口に「南無阿弥陀仏」をとなえながら、浄土に往生する他力易行道にすすむことが最も賢明な態度と考えているが、いかがなものであろうか。

◇表紙版画絵を書き終えて……◇

ひとこと御礼を

もともと仏像は好きでしたが、学生の頃（大平洋戦争が始まる一寸前）たまたま興福寺の阿修羅の写真で、仏様らしくない仏様のあることを知り、また暫くして奈良の古い博物館入口の正面のガラスケースからはみ出さんばかりに、大きく立ちはだかったお姿に、思わず息を吞んだ感激は忘れられません。ホントーにビックリ仰天でした。丁度阿修羅の左後ろから秋の夕明りが差し込んでいました。暫くその恐くないお顔と睨めっこして以来、古都を訪ねる楽しみが一つ増えました。

小林治郎

（版画家）
『浄土』表紙絵担当

その頃は「校門は営門に通ずる」と言われ私どももまた戦争に征き、負けて帰ってききました。するといろいろな事がガラリと変わってしまいました。信頼するもの尊敬するものが全く失くなってしまい、それからかれこれ四十年、あれこれして今の世になりました。住み良くも住み難くもなくほどほどのなかで、割合気儘な事をし乍ら何とか暮しが出来る齢ごろになり、まずは有難い世の中です。

この度は大切な『浄土』誌の表紙に軌範外れの仏様を二年間も載せて戴き、皆様の御寛

容に感謝いたします。怠け者を自認いたしており、月々のメ切りは可成り御迷惑かけましたが、曲がりなりにも終了出来て有難うございました。

先頃物故しましたが、遠い縁続きの信州の古城の草笛の坊様がある時「僕は世の中で一番の怠け者……何しろ全然働かないで食べさせて貰っています……云々」と笑われた皺深

い穏やかなお顔が何とも言えませんでした。十二月号では思惟像と閑是宝と全く関係の無さそうな組合せにしましたが、その文句のように暮せたらさぞ幸福だろうなと思います。ウツラウツラ何もせず何も考えず……。勝手気儘なこと許り大切な紙面をお借りして申しましたが、一ことお礼言上まで、有難うございました。

丑 師

〇〇〇プロフィール〇〇〇

新しい表紙絵版画家・松 浦 春 子

(光風会々友
日版会々員)

- | | | | | | |
|------|----------|--------------|------|------------|-------|
| 一九七五 | 日本板画院展出品 | 奨励賞受賞 | 一九八〇 | スペイン美術賞展出品 | 欧遊 |
| 一九七六 | 七彩会展出品 | 会友 | 一九八一 | 日版会展出品 | 万花賞受賞 |
| 一九七七 | 西田亨氏に師事 | 七彩会々員・七彩会賞受賞 | 一九八二 | | 七彩会理事 |
| 一九七八 | 光風会展出品 | | 一九八四 | | 光風会々友 |
| 一九八〇 | | 光風会奨励賞受賞 | 〃 | 日展入選 | |
| 〃 | 日版会展出品 | 会員 | 一九八五 | 〃 | |

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。今回も、松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、**金二五〇〇〇円**というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（七）

— 敦煌（ゴビを行く） —



木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

（随筆家）

九月七日、旅も半ばである。

午前八時二十五分、二晩泊った敦煌賓館を出発する。空は高曇り。これによって気温はある程度抑えられそうなので、バスの旅には有難い空模様だが、反面私がひそかに期待していた蜃気楼を見るにはいささか不利な条件と言わねばならない。蜃気楼は地上の温度が上昇した時、空気の密度の違いによって光線が屈折するため、地上の物体が空中に浮かんで見えたり、遠くの物が近くに見えたりする現象。逃げ水もその一つ、何かで読んだ記憶があったからである。

安敦公路へ出たバスは、黒いアスファルトの道を安西目指してひた走る。安西まで約百二十キロメ

トルの道程である。莫高窟への分岐点に立った白い案内碑も、空港の建物も、ポプラ並木も、どんどん後ろへ飛び去って行く。窓の右側に遠く、三危山だけがいつまでも付き合ってくれている。三危山の頂上近くにある建物はラマ教の寺院だというが、それが時々キラッと光る。寺院の規模は判らないが、この距離から見えるということは、かなり大きな建物であるに違いない。少しでも天に近づきたいという思いが、あのような場所に寺院を造らせたのであろうが、信仰の力というものの強さをつくづくと感じる。

ポプラの並木が切れると、道はあっさりゴビに突入した。坦々とした道のようであるが起伏があり、頂点に出ると視界がひらけるが、荒涼たる景色に変化があるわけではないから、大波を打ったようなこの起伏はあまり気にはならない。

それよりも、そろそろ始まるのではないかと恐れていたことが、やはり始まった。頑丈な体格の中年の運転手は、敦煌の空港以来ずっと専属で我々のバスを運転してくれているが、なかなかの演歌好き、それも千昌夫一点張りで、初めはサーピスのつもりかと軽く聞き流していたが、繰り返し繰り返し同じテープを聞か



——烽火台——

されるのには閉口した。こりなると彼の趣味としか言いようがない。もっとも、もっとうがった見方をすれば、彼はこのテープしか持っていなかったのかも知れないが、スピーカーから今日も「北国の春」のメロディが流れ出したのである。

敦煌を出て何キロメートル走ったであろうか。車の正面に、ほぼ原型をとどめた烽火台が忽然と姿を現した。道は烽火台を避けるように、ゆるく右にカーブしている。第一回目の小休止はここで行われた。

日干し煉瓦を積上げた、四角い大きな煙突といった感じの烽火台は、長い年月の風雪に耐え抜いた風格さえ感じさせる。烽火を辞書でひくと、のろし、そして狼煙の字が当てられているが、これは可燃物に狼の糞を混入したためと説明されている。狼の糞を混ぜて燃やすと、煙の色がよくなるのかどうかは知らないが、勢いよく煙の出る物は何でも手当たり次第に燃やして、異民族の侵入を逸速く都へ報せたのであろう。

約十分の休憩の後、再びバスは小さいオアシスを点綴しながら、ひたすらに安西を目指す。いつか三危山も見えなくなってしまった。道から大きくはずれたところに、大オアシスがあったりするのを見ると、日本に於ける鉄道や高速道路の誘致合戦を思わずにはいられない。道路からはずれたことが、あの集落にとって運が悪かったのか良かったのか……。それにしても「空に飛鳥なく地に走獸なし」の荒涼たる砂礫の原とばかり思っていたゴビに、意外にオアシスは多いのである。殆ど数キロメートルおきにあると言っても過言ではない。大抵は道路の両側にポプラの並木を持っており、日干し煉瓦の土屋が何軒もあり、家の近くに畠が作られている。庭先では放し飼いの鶏が遊び、豚が寝転がったりにしている。しかし、道路が出来てから生れたと思われる集落も無いでは無い。それらは樹木が少ないのですぐに判るが、水は遠くの河から引いているのであろうか。地図によれば、あちらにもこちら

にもやたら疎勒河という名の河が流れていることになっているが、今は渇水期で酒泉に着くまでとうとう水のある河に出会うことはなかった。

往路飛行機から見たゴビに、勝手気儘な痕跡を残していた乾河道を、今度は地上で眺めると、不思議なことに気づいた。河の片側の岸だけがせり上っているのである。高い物は一メートル以上もの壁となっている。多分水圧で押し上げられたのだと思うが、それなら蛇行した場合には、逆に反対側がせり上らなくてはならないはずなのに、それは見られなかった。まことに奇妙な現象と言うほかは無い。

安西の町に入ったのは、十時半過ぎではなかったかと思う。昔、瓜州と呼ばれていた頃の安西は、古い敦煌同様に砂の下に埋まっているという。まさしくここも亦砂の町である。町の目抜き通りと覺しき辺りは市場になっていて、野菜や果物を山と積み上げて盛んに客を呼んでいるが、砂が市の賑わいを吸収して騒々しさは感じない。十字路の真ん中で、旋風が砂を巻き上げていた。

味はへと小さき林檎手渡さる

辻に舞ふ砂の朧や草の花

バスはここで甘新公路に乗り入れ、東へ約三百三十キロメートル先の、今日の宿泊地酒泉へ向けて快調に走り続ける。何回目かの「北国の春」に、若者たちは中国語で唱和している。安西を出てしばらくして、布隆吉（チリウキ）というところにさしかかる。この辺りは中国で最も風の強いところとされており、風に削り取られた奇妙な形をした土塊が、累々とゴビの中に置かれている。このような地帯をヤルダン地帯というのだそうであるが、延々二十キロメートル近くも続いているという。人頭像のような物

もあれば、子供が喜びそうな怪獣めいた物もある。立ったのもあれば、寝転んでいるものもある。余分な物はすべて削られてしまつて、黄土塊は極限の姿を我々に曝しているのである。心なしか他のところと違った風が吹いているような気がして、足許のいかにも硬そうな大瓦状にめくれた土塊を蹴とばすと、爪先に当たった感触はなかったが、パッと舞い上った砂の微粒子を、アッという間に風が攫つて行つてしまつた。

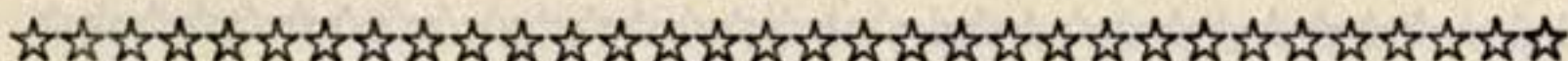
ゴビの遠近に砦や烽火台の欠片が散らばっている。かつては人が生活した場であるが、その大方は崩れたり、半ば砂に埋っている。布隆吉のモンスター群の次に見たのが、橋湾城の遺構であつた。それは甘新公路の左手約五百メートルのところにあつて、城壁だけが残っていた、というよりは城壁だけが造られた特異な城であつた。何が特異かというと、清の中興の祖といわれた乾隆帝が、夢に現れた美しい城をこの地に再現させようと、大臣の一人を奉行としたが、彼は業者から賄賂を取つて私腹を肥やしたのがばれて処刑されてしまつた。やがて皇帝の築城熱が冷めると、城壁だけ完成した城は打ち棄てられ、砂に埋まるに任せられたのである。しかし、何故わざわざ辺境の地を選んで築城させたのであろうか。乾隆帝ほどの人物でも、こうした愚挙を敢えてするところが、人間の性の弱さ（さか）なかも知れない。

今日の行程のほぼ三分の二を走破して、昼食は玉門市にある玉門鎮招待所で摂つた。建物に入つて行くと、今まで流していたメロディを中断して、三橋美智也の古いヒット曲「夕焼とんび」のカラオケが聞こえて来た。土産物売場で、サンヨー製のカセットコーダーを操作していた若い女性の気転と私は受けとめた。更によかったのは、それ一曲にとどめてくれたことであつた。それにしても、ここでこの曲を聞こうとは……。玉門市というありきたりな呼び方よりも、玉門鎮という方がいかにも辺境の町らしくて私は好きだが、かつてここは玉門関守備隊の駐屯地だったところである。敦煌の先に

ある玉門関は漢代の物で、唐代には中国の版図も狭まり、玉門関も安西と玉門鎮の中程にあったと推定されているから、「唐詩選」もその辺を頭に置いて読まなければならない。有名な王維の「送元二使安西」(元二の安西に使いを送る)の結び、「西出陽関無故人」(西の方陽関を出てしまえばもう友はいないのだよ)の陽関はどこに埋没してしまったのであろうか。こんな些細なことでも国威の消長が窺えて面白い。

三分の二来たということが一行の気を楽にしたのか、露店を冷やかしたりしてかなり時間を食ってしまった。更に甘新公路に出た途端、バスは覆面をして小旗を持った女性にストップさせられた。道路改修のため通行止め、迂回せよと言っているらしいが、勿論我々に判るわけはない。若い女性らしいが、一步も引かないで運転手とやりあっている。なかなかの迫力である。「日本にもああいふ人いるね」「いるいる、ミニバトカーの婦人警官」「駐車違反なんか絶対許してくれないものね」バスは一度引き返して、一人の男を乗せて現場に行くと、今度はあっさり通してくれた。「あれ、きっと旦那だよ」「いやあフィアンセだよ。男を見る目が輝いていたもの」「不倫の恋って線もある」と若者たちは口さがさない。「中日友好に協力しようと説得しただけさ」私が言うと、「夢がないなあ」と一蹴されてしまった。何のことはない、道は片側交互通行が可能だったのである。思わぬハプニングで、ここでまた随分時間を食ってしまった。こんなに道草ばかり食っていて、果して夕方までに酒泉に着けるのだろうか。途中、嘉峪関かよくかんの見物も予定されている。いくらあなた任せの旅だとは言っても、いささか心配になる。

(続く)



立ち止まるな善導

〈20〉

寺内入告

挿絵・松海達文

神聖病後遺



太宗が死んだ。貞観二十三年（六四九）の五月二十六日、五十二歳の男盛りであった。

長安の五月は酷暑の極点にある。すでに体調を乱していた太宗は、四月初めから皇宮を出て長安の南四十キロの終南山、避暑離宮の

翠微宮で静養中であつた。病勢は日々に悪化していたようである。

直接の死因は痢病だつた。激しい下痢がくり返され高熱を発し、衰弱しきつた昏睡のなかで息を引き取つた。だがこれは死へ追いつめられた末期の症状であつて、そこまでに至る病いの経過は不明である。

一説に「神聖病」だつたとささやかれた。



てくる。

褚遂良は太宗創業このかたの功臣で「直諫の士大夫」として重んぜられてきた。相手かまわずにつけづけと物を言う。天子といえども容赦はしなかった。それだけに游泳術は下手クソで、重んぜられた割には廟堂における地位は低かった。

長孫無忌は太宗の病いが篤くなるやこの褚遂良を抜擢して中書令という宰相の地位を与えた。皇太子の地位保全には恰好な防壁である。ところが崩御の直後、未だ諒闇のさなかだというのに、いきなり褚遂良を田舎の県知事に降格してしまったのである。

百獣の王、とうたわれた猛将李世勣もまた砂塵の彼方、甘肅省の都督に追放している。「私も宰相のお供をして同州へゆくことになりました」

若い吏生の王徐明が善導のもとへ報告にきた。表情に安らぎの色があった。都から離れたのが近ごろ王徐明の願いだった。同州は

陝西省の片田舎で、褚遂良はその刺使となつて赴任することになっている。

「宰相と共に暮せるのであれば、貴郎も宿願が果たせるというものです」

善導はいちおうは祝福してやった。

「はい、これからは迷うことなく書道に専念できます」

褚遂良は唐の初期を代表する名書家であった。王徐明は廟堂における上司としてだけではなく、書道の面でも師と仰いできた。それがこのたび中央政界を離れるという。王徐明は進んで都落ちを志願した。政務は二の次だ。褚遂良の身边に随侍して、書道の本質をとことん学び取ってやろう、と新たな意慾を燃やしている。

王徐明のこの選択が、やがて彼の運命を急角度に変えてしまうわけだが、それには数年の歳月を待たねばならない。この時期では、善導と暫しの別離ということになる。

善導としては因縁浅からぬこの若き吏生に

別れの忠告をしておきたかった。

「この前も言ったと思うが、貴郎は柿の葉に書いた文字が認められて官途に職を得ました。目指した官界が腐敗しきっていることを知り、貴郎は出家でもして書道に専念したいと言った」

「和上はそんな私を叱りました。一度選んだ道を捨てる意志の弱さを……」

「いや、意志が弱い強いの問題ではないのです。出家でもしてというそのでも、なのです。

それは逃避以外の何ものでもありません」

「出家遁世が逃避ではないとおっしゃるのですか」

「誤解され易い用語です。出家とか遁世という言葉の意味だけにとらわれていると、何か孤立化して、ひたすら霞でも食べて瞑想にふける姿が想像されるでありましょう。しかしそれは間違いです。出家遁世して何をするか。その何かをあらかじめ考えようとはしないからです」

「その何かとは何でしょうか」

「仏法を求めての出家であり、遁世なんですよ」

「剃髪するわけですから、そういうことになりますね」

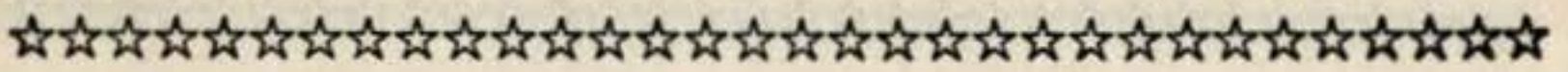
「仏法を求めろのに霞を食べて瞑想にふけているばかりという生き方はあり得ないので。仏法はたえず前進していなければなりません。求道とは全身全霊を燃え尽させながら一点に向かって走り続けることです。その前身する過程で俗事にかかずらあったり、欲念に眼をそらさない。これが出家遁世であって、目指す目的まで見失うことではありません」

「和上、もう少し具体的にお話し下さい」

「さよう……こんな実例で話したらわかってもらえるでしょう。私たちの先輩でこんな遁世者がいました。あるとき思い立って高い樹上へよじ登りました」

「樹へ登ったのですか」

「太い枝の上に蔬を敷き、そこへ坐りこんだ



遁
世



まま二度と地上へ降りて来ようとはしませんでした

「鳥みたいですわね」

「まさしく鳥です。みんなは鳥行者と呼びました」

「それこそ遁世ではありませんか」

「そうです。汚れた人間界は捨てました。

でも捨てたのは人間界だけでした」

「その行者は何を食べて生きていたのですか。霞ではありませんか」

「違います。木の実や運んでくれる餌を食べました」

「餌を運んできてくれるんですって。誰がですか」

「鳥ですよ」

「鳥の餌……」

「そうなんです。彼が樹上へ登ったのは、その繁みで暮している鴿たちの仲間になることでした。人間の愛情というものが、鳥に通じるかどうか。それを自分の眼でたしかめた

かったのです」

「それで……」

「和尚は枝上を這いまわって掻き集めた木の実やあらかじめかついで登った糠の粉を、飛んでくる鴿たちに分け与えました。鳥は悦んでそれを食べました。お礼のつもりで、よそから餌を嘴にくわえ、和尚のもとへ運んでくるようになりました。すっかり仲好くなって和尚はいつまでも樹上生活を続けました」

「鳥と仲好くなるのも仏法ですか」

「立派な仏法です。お互いに助け合って仲よく暮すということが立派な仏法なのです。和尚がこの樹上へ登った動機が、山麓の寺院で後継住職をきめるにあたって争いが起こり、和尚自身もその渦中へ巻きこまれそうになったからです。和尚の行方を探がしていた山麓の寺僧たちが、ようやく所在を突きとめて集って来ました」

「何と言いましたか」

「争っていた二人の先輩僧はお互いを傷つけ

合って寺を出ていってしまった。和尚よ、早く寺へ帰って下さい、と。和尚はそれに言いかえしました。こんなに仲良くなった鳥たちと別れることができると思うか……おわかりか。この和尚は汚たらしい寺を飛び出して樹上へかくれたが、そこで浄化された世界を鳥たちとつくり出したのだ。これが仏法における出家遁世というものです」

「よくわかりました。私は同州へ行ってこれまで以上に政務に励みます。書道にも精進いたしましょう」

王徐明の面上に此処へ来たときは全く異質な輝色が差しこんでいた。形は同じ楮遂良宰相に随行する都落ちだったが、心の深層部でおどんでいた逃避意識が跡方もなく拭い去られた思いであった。

二

太宗の「遺言」を伝達する者、それは高官

寵臣たちだけではなかった。一群の女性がいた。太宗との間で、肉慾の渦に巻かれながら放言にひとしい愛の口説や約束を聞いた妃嬪たちである。放言にひとしいとは言っても、そこに政務や人事がからんでいると、聞き捨てならない「先帝の遺言」となってしまふ。崩御の後、往々にしてトラブルの原因を作った。

これを防止するために昔は皇帝が死ぬと、愛妾たちは「殉死」の美名下、殺されるか自殺を強いられた。仏教を採り入れた王朝では「殉死」のかわりに出家剃髪を命ずるようになった。遺言のトラブルもだが、先帝の愛妾が詰まらぬ男と再婚なぞして道を誤まることを避ける目的もあったはずである。

太宗の場合も子供を生まなかった側室の全員が出家させられたのである。感業寺という尼僧院へ封じこめられた。

この感業尼寺へ強制出家させられた「美しき囚人」たちのなかに後の則武武后——武照

氏がいた。十九歳か二十歳になったばかりの若き未亡人である。

「資治通鑑」や新旧「唐書」はその感業尼寺であつた男女の出合いを、一篇のドラマに仕立てあげる。

故太宗の三回忌供養が営まれた。その日、新帝の高宗が前ぶれもなく感業尼寺へ現れたのである。黒衣に身をかため、青々と頭髮を剃り落した亡父の愛妾たちが合唱する誦經に聴き入った。ふと高宗の眼は、列中の一点へそそがれた。

かつて父の後宮にいたいいたいけない少女武照氏がいるではないか。じつはそのころ、高宗は父にかくれて少女と肉体関係を結んだことがあつた。おそろしく勝気な少女で、帝王も皇太子も眼中になく、好色な欲求を奔放に発散させてきたのである。病弱で、内気な高宗は彼女のそんな性向に強く魅惑された記憶がある。

いま万能の主権者となつて、かつての魅惑

を再び味わつてみたい思いがしきりであつた。供養が終ると、高宗は庵室へ戻る尼僧の列へ近づき、武照氏の黒衣の袖をそつと引いてみた。

見上げてくる武照氏の大ぶりの丸い眼は無言の訴えを新しき帝王へ語りかけた。

——妾はこの僧院で朽ち果ててしまうのです。あなたと結んだかりそめの悦楽も今や遠い日の夢となつてしまいました。助けて！もう一度、女に戻して下さい。何度とは申しませぬ。一度だけ抱いて下さい！

哀れであつた。それ以上に、黒衣や落飾した容姿が高宗の戯れたい気分をそそりたてた。

高宗は尼僧たちを監督する宦官の一人をさし招いてささやいた。彼の個室を提供させた。やがて現れた武照氏は黒衣を脱ぐひまもあらばこそ、高宗の胸へ全身を投げこんでいた。

二人の情交は復活した。これは後年の話だ

いでも思ったのか。

「貞観の治」とうたわれた理想が突如としてくつがえり、弁機法師を「腰斬」の極刑に処したり太宗の態度が俄かに狂燥化してくる。これは「性」の変調から由来したとも推理できる。ことに不義密通には嫉妬に近い潔癖感を示しはじめる太宗だった。

となると十四歳の武照氏が太宗の後宮へはいったという事実にも疑問が投げかけられてくる。じつは皇太子治（高宗）の後室入りだったのではないだろうか。父の側室を盗んで密通したのではなく、ほんらいが武照氏は高宗の「女」だったとも考えられる。

感業尼寺へ閉じこめられた太宗の妃妾集団もそれほど大げさなものではなく、だからこそ感業寺の所在は判然とせず、ごく一部の少数者がそこで落飾した、と推理したくなるのである。

推理をさらに逞しくして、密通を逆の立場に置き換えてみたくなる。つまり皇太子治の

後宮へはいった武照氏が父王太宗へ色眼を使ったのではないかという推理である。後年の妻さまじいばかりの則天武后の権力慾を思えば、充分に考え得る。十四歳の少女が五十の坂に近づこうとしているオジンを誘惑しようとしたのである。相手は絶対権力を握る現職の帝王だからである。

おそらくこの冒険は、性に不調をきたしていた太宗に不発でおわったにちがいない。しかし、この冒険によって武照氏は太宗の死に殉じて尼寺入りをしなければならなくなった。淑妃ら高宗の愛妾たちによって告発されたからである。

ほんの気まぐれな冒険、いや女にすら成りきっていない少女が、年齢以上に老いさらばえた父王を慰さめてあげようとした行為に密通の汚名をかぶせられた。尼寺へ強制収容だ。武照氏がどれほど肅淑妃らを憎んだか。

高宗の寵を感業尼寺で取り戻し、後宮入りを遂げた彼女が妻さまじい復讐の牙をとぎすま

し、肅淑妃らを次々に殺害していった動機も
うなずけるといふものである。

三

善導は終南山に籠もりきっている。

だいたい善導の生活は、長安の實際寺とこ
の悟真寺とを毎月、半分づつ滞在するのが近
ごろの慣例だった。街へ出て、さまざまの人
々に遇って念仏教化につとめる。しかし、街
にばかりいたのでは修法や勉強にさしつかえ
る。終南山に籠もって内に貯蔵するものを増
量させるのである。

その滞在がこんどは長引いてしまった。先
月から一度も長安の街へ出向かなかった。理
由は近くの豊徳寺に住む道宣が新訳による浄
土の經典を持ちこんできて、善導の意見を問
いただしたからである。じっくりとそれを読
みこなすのには時間が必要だった。

新訳の經典とは玄奘三蔵が持ち帰った「称

讃浄土仏撰受経」である。玄奘は帰国する
と、すぐにこの一卷を翻譯に取りかかった。
「玄奘法師が是非これをあなたに披見しても
らい、意見を徴したいと希望しておる」

道宣は置いていった。

道宣は年齢のうえて善導より十五、六歳先
輩だった。湖州(浙江省)の出身で、仏教にお
ける律の専門家だった。もっぱら終南山にい
て四分律の研究に励み、多くの門弟も養った
ので「南山律の祖」と後世呼ばれるようにな
った。

だが、後世が道宣の名を高くさせたのは律
僧としてではない。「続高僧伝」の編述者と
して広く知られている。

その続高僧伝の「会通伝付善導伝」で道宣
は紹介している。

——近ごろ山僧善導なる者有り、襄陽を周
遊し、道津を求訪す。行きて西河に至り、道
綽禪師に遇う。ただ(惟)念仏して弥陀の浄業

を行ずるのみ。既に京師へ入り広くこの化を行す。弥陀經数万卷を写す。士女の奉ずる者、その数は無量なり。時に光明寺に在りて說法す。人有りて導に告げて曰く。いま仏名を念ず、定めて浄土に生まるか、非ず（不）か。導曰く、念仏せば定めて生まる、と。その人、礼拝しおわ（訖）って、口に南無阿弥陀仏を誦し、声々あい次いで光明寺の門を出づ。柳樹の表にのぼり、合掌して西を望み、身を倒し投げておつ（下）。地に至りて遂に死す、事、台省に聞こゆ。

柳樹からの投身者については前で触れた。ここでは道宣が、遙かに年下で、未だ現存している善導の伝を「続高僧伝」へ書き加えた事実を考えておきたい。道宣自身が示寂したのは高宗の乾封二年（六六七）で、善導五十五歳、その死まで十四年を余している。普通、伝記を編する場合、その人の生涯が閉じられてから書くのが常識であろう。いわんや「高

僧」と銘うった伝記である。晩節を汚がすようなことがあれば、たちまち「高僧」の資格は失われてしまう。それを道宣はあえて善導伝を書いた。善導へ寄せた畏敬の情が並みなものではなかった事実を物語っている。

ところでこの太宗が死んだ永徽元年、道宣はしばしば大慈恩寺の訳経場へ出入りして、玄奘の訳業を手伝った。もちろん彼の専門である「律」に関する訳経は主役となって精力的に筆を積んでいた。

「この經典こそ浄土の根源をなしているものと玄奘法師は断定されるが、あなたはどうか考えるか」

善導が披読し終ったところを見はからって、道宣は再び悟真寺へやってきて問いたたたした。

「經典は批判するものではありません。信じかたがそれぞれに異なるのは、やむを得ないことでしょう」

「すると、あなたは玄奘法師と意見を異にす

るわけだな」

論師でもあり、また現代流で言うジャーナリストでもあった道宣は短絡的に追究してくる。

「意見を異にするのではありませぬ。信じかたの相異でございます」

善導は辞も柔らかく、しかし断固たる確信を胸底に秘めたまま、道宣との、ひいては玄奘三蔵との論争を回避した。

「称讃浄土仏撰受経」は「阿弥陀経」の異訳であって、鳩摩羅什の旧訳とそれほどの違いはない。現に日本の法然も、「選択本願念仏集」で臨終時における阿弥陀仏の救いに関して、この經典から引用している。しかし善導は、生涯用いず、もっぱら鳩摩羅什記の「阿弥陀経」だけだった。これは思うに、いま道宣に語ったように經典の字句が問題なのではなく、信じかたであろう。この場合は訳者玄奘三蔵の浄土思想に善導は同調し得ないものを読みとったのではあるまいか。

玄奘の浄土思想は立場上、弥勒兜率天としての浄土である。それを信じた人の手になる訳文、選語には必ずその思想がにじんで出る。詳細は指摘し得ないが、善導は「阿弥陀経」一巻だけにしぼって、この新訳經典をかえりみなかったと思われる。

「文徳皇后は道綽禪師の篤い信者だったということだが、あなたは亡き皇后に面謁したことがあるかな」

道宣は話題を転じてきた。

「いや、ございませぬ」

「たいへん仁徳の深いお方だという評判だが、その血を受けた新帝や宰相はどんなものだろうのう」

新帝高宗は文徳皇后の息子だし、いま着々と廟堂内で独裁権力を固めつつある長孫無忌はその実兄だった。

「新帝も宰相も全く存じあげていません」

善導の返事は冷めたい。道宣の関心事にまるで反応して来ないのである。道宣も長い付

合いなので、そんなことは百も承知だ。勝手にしゃべり続ける。

「王位の交代、継承というものは、どれほどうまくやりおおせても必ず破綻が出来てしまう。いわんや無忌宰相のやり口は強硬すぎた」

「そうですか」

「あの人は過剰な忠誠心で湧き立ってしまったのだ」

長孫無忌が独裁権の確立をねらったのは、自己の権力慾からではなかったという。太宗と文德皇后の間で築き上げたこの唐王政を、何としてでも守り抜きたかったからである。自己が独裁権を握っておかないと、誰かにやられる、奪われる、と被害妄想したのであった。

道宣はさらに続けて、

「これで玄奘法師も政事を離れることが出来るであろう。心ゆくばかり訳経に専念出来る」

「法師もずいぶん忙しかったのでしょう」

善導は場あたりではなく、心からの同情を眉をひそめることで示した。

「あんな事件のあとだけに宮廷に巢喰う道士どもが、あること無いことを言いふらして仏法撲滅を策したものだ。玄奘法師はこれと闘うために奔命した」

この国古来の宗教思想だった道教——その仕人である道士が、唐王朝にはいたのである。もっぱら呪術的な神事礼儀を司ってきたのである。弁機の密通事件をきっかけに、この道士らは俄然、攻勢の火蓋を切った。玄奘は膝を屈して太宗との仲を保持することにとめた。これも護法の一念だったと道宣は弁護する。

ちなみにこの道宣は、生涯道教思想との闘いに明け暮れた人でもあった。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
- 一、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十二巻 二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十一年一月二十五日 印刷

昭和六十一年二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷（株）

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

千一〇三 振替東京八一八二一八七番

第五十二卷

二月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十一年一月二十五日印刷 昭和六十一年二月一日発行